

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第 7 回高松市創造都市推進懇談会（U 4 0 / 第 4 期）
開催日時	令和 2 年 9 月 1 8 日（金） 1 8 時 3 0 分～ 2 0 時 3 0 分
開催場所	高松市役所 3 階 3 2 会議室
議 題	（ 1 ） 「 U 4 0 として市に求めるもの」と「自分たちができること」
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	徳倉会長、穴吹副会長、大崎委員、河田委員、桑村委員、笹川委員、田中委員、瑞田委員、中村委員、眞鍋委員、若林委員、渡邊委員
市職員	美濃、三谷
事務局	石川部長、吉田部長、西岡課長、宮脇課長補佐、三浦係長、松下主任主事
傍聴者	1 人 （定員 2 人）
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 8 3 9 - 2 4 1 1

審議経過及び審議結果

- 1 開会
（事務局から欠席委員について報告）

- 2 議題（1）「U 4 0 として市に求めるもの」と「自分たちができること」

【会長】

今日は事前に作成していただいたワークシートを基に議論を進めたいのですが、通常、ワークシートは、その性質上、その場にみんながいないと成立しないので、どうしたものかと考えていたのですが、皆さんの御意見を伺いながらいろいろと試行錯誤をしていきたいと思っております。まず、この状況下で、W e b 会議を始め、開催に向けて環境を整えていただいた事務局の皆さんに御礼を申し上げます。そして、各委員におかれましては、ワークシートを御記入いただきましてありがとうございます。

では、全員分をそのまま読み上げてくださいますと、それで 1 時間ぐらいが終わってしまうので、皆さんの御手元には事前に作成していただいたワークシートがあるかと思いますが、この W e b の状況の中でどういうふうにまとめたらいいのかをいろいろと考えていたのですが、実際に今ある課題と

審議経過及び審議結果

将来の20年後の課題、U40というくくりを含めて、自分たちができること、市に求めることの4つの方向性で話が出てきた中で、どういうふうに分けていくのかということで、まず、今ある課題について、皆さんで議論をさせていただきながら、その中で自分たちができること、市に求めること、じゃあ今ある課題が20年後に、どうリンクし、どういうふうになっていければいいのかというのを、ゴールまでいけるのか分かりませんが、話を深めていきたいと思っています。

では、今ある課題のところ、何人かに話を伺いたいと思います。

【委員】

2018年9月に開催された日本パラ陸上競技選手権大会では、U40の皆さんに御支援いただいたおかげで大成功という形で終わりました。来年4月にもジャパンパラ陸上競技大会という大きな大会が開催されるに当たり、以前は小学校に出前授業に行ったりだとか、いろんな活動ができたのですが、こういったコロナ禍の中で、U40も11月で終わってしまうという中で、成功に終わることができればと思っています。

【会長】

質問ですが、現実、今、困っていることだとか、こうしたいけどできないみたいな、この部分で行政や自治体、U40などで、これがうまいことできるのにといったようなことはありますか。

【委員】

今、コロナであったり、政治の話であったりということで、来年4月に開催されるということが薄れつつあるので、このままだと4月は大丈夫なのかなという、選手としての不安は少なからずありますね。

【会長】

それは選手として、同じようなパラアスリートの皆さんが抱えている感じでしょうか。

【委員】

そうです。

【会長】

その中で、自分たちでできることを書いていただいています。他のU40の皆さんとか、市の発信のようなところを、どういうふうにしてもらったら助かるなというのはありますか。

【委員】

現状で、パラアスリートの選手会の発足だとか、いろんな形でしていこうとしているのですが、選手が中心ということで、力不足というところもあって、なかなか、思った以上に各SNSのフォロワーが増えていないというのが実情です。U40の皆さんを始め、市役所の皆さんには、そういったところを御協力いただけると、私たちにとっては、うれしいです。

【会長】

そうすると、オリンピックもあり、パラリンピックもあり、その前の大会もありというところでの機運の醸成というのがあると思うのですが、U40でもCAN MAPを作ってみたり、それがいろいろと取り上げられたりというような動きを、このコロナ禍だけでも仕掛けていければということが一番求めている形ということでしょうか。

【委員】

そうです。

【会長】

それでは、20年後の課題を書いていただいているのですが、パラアスリートとしての競技者の面もお持ちであると思いますが、御自身が20年経ったときに、どういう課題を持ってこういうふうにかかれたのでしょうか。

【委員】

パラ陸上でいえば、日本選手権であったりジャパンパラの誘致が成功してきて、「高松市ってパラに積極的に取り組んでいるよね」という声ももらっているのですが、それが、5年、10年、20年と経ったときに、引き続き、「高松市がパラに力を入れてるよね」と言ってもらえるようなことが、選手としては理想ではあるのですが、もちろん、高松市の担当課の主にやっている人も異動

がありますし、異動をした中でも継続して、「高松市はパラに力を入れてるよね」って思ってもらえるようになったらいいなと思っています。

【会長】

20年後もパラに力を入れている自治体だと表明し続けて、パラを押し続ける自治体になってほしいという感じですね。

では、続いての方に、いくつか質問させていただきます。今ある課題に「市長および行政と市民との対話、危機感の共有」とあり、実際に知事との対談を流したりだとか、いろんな発信ということをずっとやられてきていると思いますが、それが高松市というところにフォーカスしたときに、こういう危機感の共有というふうに記載されたのではないかと思ったのですが、そのあたりをお伝えいただければと思います。

【委員】

まさに、そういうお話なのと、コロナ禍でいろんな課題が浮き彫りになってきたと思うのですよね。特に、インターネットだったりデジタルへの移行だったり、日本が遅れていたということが分かったのと、改めて少子高齢化の時代において、関係人口という言葉に逃げない、高松市の人口を増やすようなことをやっていかないと、この先、税収も減っていくというのも、危機感を皆で一緒にもつようなきっかけを作ればというところで、まず課題のところで、そういう内容を記載しています。

【会長】

現実、いろいろな発信を行う上で、「市長および行政と市民との対話」とありますが、例えば、タウンミーティングみたいなことを、市長がされていたと思うのですが、こういうふうな形でやったらいいのではないかというような、他の自治体はこういう方式でやっているというような、デジタルのやり方があるのではないかというようなアイデアなどがありましたら教えていただきたいです。

【委員】

実施自体がデジタルの世界になってくるといえるか、そういうコミュニケーションが必要なんじゃないかと思っています。別に民間が行政の敵だという話ではないですし、視座を合わす機会という意味で、フランクに話をするべきだという意味です。

【会長】

それは、例えば、自分たちでできることと書いてくださっていることと、市に求めることを合わせて、自分たちができることはこういうことだよ、自分たちがこういうことをやっているけれども、市が組んで一緒にやりませんかみたいな、そういう場をたくさん定期的に持てればいいのではないかというアイデアでしょうか。

【委員】

そうです。

【会長】

となると、そこから20年後の課題で、「市民および若者の投票率の向上」というところに結び付けている意味がどこにあるのか、特に若い方にフォーカスして取り組んでいるかと思うので、そのあたりを教えていただきたいと思います。

【委員】

若者の投票率が上がらないと、議員さんがそこに目を向けない。だからこそ、ああいうゲームの条例ができてしまうのではないかとこのころに帰結するかと思っておりますので、その条例の良し悪しという話ではなく、やはり若い世代が住みやすいということは、将来的な人口維持につながると思っております。若者の定義が10代、20代だけでなく、今、人生100年時代と言われているので、40歳ぐらいの人も若者じゃないのかということはいくら議論が必要だと思っておりますが、そういう若い世代が意見を言いやすいようなまちに20年後になっていけばいいなと思います。

【会長】

まとめると、デジタルの恩恵を全ての人を受け取れるようなまちになればいいというニュアンスですか。

【委員】

そうです。

【会長】

一つだけ質問として、市に求めることは「プラットフォームとして、民間企業が動きやすい後押しや仕組みづくり」とあるのですが、行政がプラットフォームですよと言い切ってしまうとしたら、プラットフォームとしてはどうあったらいいとお考えでしょうか。

【委員】

民間だったり一個人だったり、そういうスポーツの団体とかあると思うのですが、そういう人たちが動きやすいようなジャンルみたいなものがあるのがよいみたいな話で、その中間を担っているのがU40なのかなとは少し思っているところです。

【会長】

U40は各種委員会とは違う形で、そういういろんな形で、チャンネルとして、出口としてあればいいということでしょうか。

【委員】

そうです。

【副会長】

一番目の委員の方は、御自身のスポーツというところで、アスリートとしての話で、私にはない視点だと思いました。次の委員の方の中ですごく共感したことは、危機感の共有というところと、投票率に反映していくというところで、我々の代表を我々が選ぶというところで、高松市の中で40歳未満の世代と銘打っている組織としては、我々が扱っても面白そうな意見だなと思いました。

【会長】

次の委員の方にも私から質問させていただこうと思います。次の方もコロナの影響がもちろんあると思うのですが、「積極的に島での活動が行えない」との項目を書かせていただいています。これって、将来の20年後の課題がググっと手前に来ているような感じを受けたのですが、島での活動を行う上で、できることと、できないことがあると思うのですが、記載の中で、市に求めることにつなげる形で、いくつかお話しいただきたいと思います。

【委員】

将来の20年後の課題にも近い、より深刻になるかと思って記載させていただきました。自分たちでできることは、大島など島のことを知ってもらうことももちろんなのですが、私たちも皆さんの活動を十分に知り切れていないこともあって、もしかしたら、知ることで活動も広がるのかなというところで記載しています。

私たちは、旅行業に近いことも去年からやっています。このコロナ禍を受けて少し落ち込みはしたのですが、いろいろと声をかけてくださるのは、リピーターのお客様で、特に海外をターゲットにしていた旅行会社は国内に目を向けて、国内フェアをしていたりします。なので、内々に向けるじゃないですけど、近いところに両方伝えていって、両方知ってもらう、ファンを増やしていくっていう活動をメインに取り組みたいなと思ったのが最初のきっかけです。

【委員】

付け加えると、U40の皆さんも、私たちも、今ある課題を伝えられるかと思ったので、こういった記載をしています。

【会長】

ありがとうございます。フレーズとして響いたのが、視察ツアーというフレーズが出てきたのですが、例えば、視察ツアーをしたときに、参加した行政の方々が、実際に視察する意味というのが、私たちが島が高齢化して空き家の現状とかコミュニティが崩壊しかかっているだとか、どういうヒントが得られるのかというのが、もしあれば、せっかくの機会なので、発信していただければと思います。

【委員】

島だけでなく、世界で少子高齢化の兆しがあると思うので、島の未来とイコールにはならないかもしれないですが、お互いがつながっていく場所というのを、御紹介させていただくことが、今、私たちがやっていることを、どういうことをやっているのかということを知っていただくということは、将来の在り方を考えるというふうにもなってくるかなと。

【会長】

こえび隊の活動が、全国の自治体だとか、それぞれに形態が違うとのことですが、広がっていくと、それぞれの抱えている問題を丁寧に洗い出しながら、それ

を発信して解決の道にできるのではないかとこのころにまで持っていく自信が
おありになるっていう感じですよ。

【委員】

最初の話に戻るかもしれないですが、地域の課題に沿って、お祭りとか、地域の
日々の暮らしの中で考えながら、単純に面白いアートで成功したかというところと違
うように思います。

【委員】

後は、私たちのような柔らかい組織が入っていくことで、発見と言いますか、
横断的に地元との間をつなぐ役割になるかとも思います。

【会長】

最後に、市に求めることで「ネットワークの構築」と書いていただいています
が、今、お話を聞いていると、島を継続的にやっている団体があるからこそとい
うところと、U40も第4期が間もなく終わるのですが、過去のメンバーのアー
カイブとか、既存のメンバーとの情報交換会とか書いてくださっているのです
が、それもやっぱり、大きな意味で、こういう委員会が継続をしていながら、
関わった人たちが変わり続けることで得られるものがあるという認識でよいです
かね。

【委員】

こえび隊を例に挙げると、誰でも一日からでも参加できるという広い窓口で、
多様な方々が参加してくれています。例えば、農家さんとかU40のメンバーそ
の方たちのものを買うとか、活動を知るだけでなくやってみるとか、最終的に
は、こういう小さなネットワークが大事なのかなと思っているところなので、ま
だ期限もあるので、このネットワークを盛り上げていくことが市が盛り上げるこ
となのかなと思っています。

【会長】

ありがとうございます。それでは、次の方にもお聞きしたいと思いますが、今
ある課題の「農業界の地域コミュニティでは当たり前だったことが、現在では人
ごとになっている。」ということが、なんとなくはイメージできるのですが、現
実として、どういう感じで当事者感がなくなっているのかということをお話し

ただければと思います。

【委員】

農業ベースというわけではなく、地域ベースのことだと思っており、農業は地域ありきの産業だと思っているので、今、コミュニティにおいて農業の担い手って本当に少なく、今、中心になっている人がほぼ70歳以上で、何とか自分の農地を耕してやっていたりだとか、池の管理や、そのための草刈りとか、地域で出たりっていう風習があったわけですよ。その中で、自分がやらなくて、人に農地を貸すっていうことが増えていったら、次の世代になったら自分事じゃなくなってしまふというのが、すごく現実であって。今、何とか人に貸してても、おじいちゃんおばあちゃんが出てきてくれるけども、その人たちも出なくなったら、草刈り自体も、人数が減ったり、そこに税金を投入するという話であったりとか、問題があるのですが、やっぱり皆さんも食べているのだったら、自分事として、文化という部分を大切に、昔からやってたから今まで続いてきた、そして、次の世代へ続いていくために、自分事として市民一人一人が考えるべきじゃないだろうか。一担い手としても、すごい大きな面積の草刈りを自分のところでやるのかすごく難しいなあって感じていますし、そこに税金を投入するようになれば、また地域から離れるというか、自分事として離れていくし、いろいろと問題を抱えています。

【会長】

それは単純に、その人でないとできないから、例えば、どこからか予算を持ってきて、ため池を整備するということでは、本質的な問題の解決にはならないということではよろしかったでしょうか。

【委員】

そうだと思います。やはり、うちの農地にも、ごみが捨てられていたりだとか、作っている農地が人のものでもあるわけですが、私自身ごみ拾いであったりとか、農地に隣接する歩道であったり草の管理というのは、やはり少しづつでもやる。人件費削減ではないですけども、気持ちがいいものですので、市民としてやろうという心がけを持ってはいるのですが、やっぱり、そういうところに捨てられると悲しくなったりだとか、関わっているときれいにしたりだとか、そういうことはやめようという気持ちになってくると思うので、市民として、自分事として参加するようなことはなくしてほしくないというのが、田舎に住む人間の気

持ちと言いますか想いです。

【会長】

その中で、自分たちでできることに「支援者を増やすこと」と書いていただいていると思うのですが、この支援者というのは、いわゆる農業従事者ではなくて、そういう活動も含めて応援してくださる人みたいなイメージなのか、地産地消のことも書いていただいています。地元で作ったものを買ってくださる人たちを増やすという意味での支援者なのか、そのあたりについて教えていただきたいです。

【委員】

両方の意味があって、両方が増えたらよいと思っっているのですが、やはり、実務的な支援者が増えない限りは難しいと思っってます。今から将来に向かってというところで、個人的な夢として、野菜塾のような、子どもたちの学童的なところを作ったりして、お金もとったりして、活動自体に価値を見出したりだとか、関わることのビジネスをやっていこうかと。そこで包丁を握る経験をされたりだとか、関わってもらっ。行動をしてもらわないと。野菜は専門店のコーヒー一杯よりも安いのに、少しでも値上がりすると高いと言われるところであったりとか、農業をしていると馬鹿にされているような気持ちになるときがあるのですよ。仕事の価値を見出してほしいので、一時的に経験する体験だとか、活動も知っておいてほしいです。

【会長】

例えば、野菜が高騰しているときは凄くニュースになるのに、豊作で安くなった時にはあまりニュースにならない。そういうことも含めて、どういふうに発信するのかということも含めて、市に求めることというので、「実力と行動力のある人に支援すること」とあるのですが、先ほども予算をかければいいものではないともあったので、どういふ支援をイメージされているのでしょうか。人の農地を借りてどんどん農地を広げている人たちもいる一方で、自分の農地が管理できない人がいて、農地が縮小していく人も増えている一方で、どういふ支援を求めているのかというのを、もしあれば具体的に教えていただきたいと思っます。

【委員】

個人としては、補助金って農業界は、すごくふんだんにいろんなシステムにあ

ると思うのです。特に、国の補償とかも多いのですが、野菜の価格に関しては、個人の保険の制度もできたのですが、市や県、国の設備投資に関する補助金であつたりだとか、我々は、やっているだけでも貢献しているような職業に当たってしまっていて、結局、次世代につなげるような、農業外に広げるような活動をしている人、波及力のある人に注ぎ込まないと、今後、未来があるところに、未来のために使ってほしいなと思います。

【会長】

要は、一律にということよりも、もっと大きくしていこう、もっと効率よくしていこうとしているところに対してということですかね。

【委員】

農業界だけでなく、他業種であつたりとか、地域のコミュニティのことを考えて、発信できるような人材であつたりとかです。

【会長】

例えば、YouTube で活躍されている人が、農業の現状を聞いてどんどん発信するみたいな活動に対して、市が何かしらの支援をするみたいな。そういうコラボをしていくことで、発信していく人に対しても、大きな意味で農業を支援しているというところで、行政が後押しをしていく流れがあれば素敵じゃないかということですね。

【委員】

そうですね。やはりコラボというのが流行っていますけども、他業種の人と関わって、いろんな人に知ってもらおうというのは必要だと思います。

【会長】

イメージがつかめました。農業の枠をちょっと取り払っているということですかね。例えば、高松で農業に関わっている人たちが、もちろん生産者もいるけれども、それを支えている人とか、発信をする人とか、様々な支えている人たちと一緒に農業をやって、それを食べるときには、こんなに豊かなんだみたいな、そういうイメージ像があるということですね。ありがとうございます。

それでは、次の方にお話を伺いたいと思います。子育ての領域に真剣に取り組んでおられ、御自身の団体も設立しているということで、今ある課題に「新しく

引っ越してきた人と、地元のつながり、コミュニケーションがもちにくい」とか「人々の暮らしに寄り添うような商店が少ない」とか、人の交流に関して書いていただいていますけども、課題と自分たちでできることに関して補足があればお願いします。

【委員】

地域と子育てがつながるみたいなことも私の団体ではやっていて、私は子育て中の家庭のことプラスいろんな人の触れ合いというのが、何の問題を解決するにも課題解決につながっていくのではないかと考えています。種類別に人々が分断されているなと感じていて、子育てが大変なら保育所を作ればいいのか、高齢者を見るところがないのなら高齢者施設を作ればいいのか、そういう一つ一つの支援みたいなのところを行政なりが作ってきたと思うのですが、それって結構お金もかかるし。現状で違う種類の人たちが集まることによって生まれるのが、課題解決にいろいろ結びつくのではないかと考えて、個人的にはいろいろな活動を作っているところです。先ほどのお話のように、農業は農業の人だけがやるのではなくて、色々な人とつながっていくということも、すごく共感できると思いました。

【会長】

その中で、このコロナ禍の中でいろいろな活動をされながらも見えてきた、コロナ禍だからこそ見えてくる弱さというものも、子育ての部分だけでなく、いろいろなところで見えてきたと思うのですが、そういう中に対して、さらにこれしてあれしてばかりではないと思うのですが、子育ての部分は支援も必要だと思うので、市に対してもうちょっと、こういうことをして欲しいという事があればお伺いしたいと思います。

【委員】

高松市だけに求めることではないのかもしれないですが、やはり、行政の委託事業だったり、行政が手を入れているところでは、この会議でも、感染対策をするのが当たり前の社会に生きての方がほとんどだと思うのです。私の周りでは誰もマスクはしていないし、人のふれあいとか交流を大切に思っている人がほとんどです。感染対策に関しては、いろいろな考えはあると思うのですが、固まって関わるコミュニティセンターみたいなところだとか、一律に絶対にこれとこれとこれはしてくださいみたいな一方的な感染対策のようなものを強要されると、

それに伴うマイナス面も同時にたくさん出てきていて。学校だったり、子育ての保育現場だったり。例えば、赤ちゃんに絵本を読みあげるときにマスクをした状態で話しかけても、言葉だけで赤ちゃんは読み取るわけではないため、すごく成長に大きな弊害が出てくると思います。そういうところをやっぱり、国全体がそうになっていくけれども、高松市が先陣を切って、こういう場合はこういう感じで、ふれあいを大事にする場面があってもいいのではないかみたいな柔軟性であったり。例えば、修学旅行も全部やめましようとなっても、日本全国の中でも工夫をして行かしてもらおうところもあったり、みんながやめているからやめようみたいな流れが、すごく高松はあるのではないかと思うし、コロナではない場合でも、高松だけではないのかもしれないですが、思いついたらパッとできる柔軟性とかは、当たり前かもしれないですが、行政はできにくいのがマイナス面になるのかなといつも考えています。私は自分たちができることや民間企業の方でお会いしてくださる方に、すぐ関係性をとりつけて協力してやるっていうことを作っていますが、求めることと言われたら、柔軟性とか、すぐパッとやったりとか、人の気持ちに寄り添うような、責任とかそういうことではないみたいなのがあればいいなと個人的には思います。いろいろ事情があるのは重々承知ですが、そういう歩み寄りがお互いにできたらいいなという理想を掲げました。

【会長】

ありがとうございます。さらにそこを突っ込んで聞きますが、一番下に「無料配布の立派なパンフレットなどにお金をかけるのではなく」とあるのですが、例えば、「無料配布の立派な」ってどんなパンフレットですか。

【委員】

例えば、小学校全員に配っている早寝早起きや朝ごはんのシール貼りとかすごいと思っていて、全部にシールがついていて、早寝早起き朝ごはんをただ貼るだけっていう。カラーでシール付きで要るのかなと、いつも思っているのです。じゃあ、小学生があれをして、どれだけ早寝早起き朝ごはんの効果があるのかなと。とにかく、パンフレットがすごく立派だと思っていて、小学校の印刷機でやるとか、デジタルで配信するのでもいいのではないかと、いつも思うのですよね。

【会長】

早寝早起き朝ごはんは文部科学省の事業だと思うので、高松市もそれを受けて

作っているだけなので、それは何とも言えません。一例だとは思いますが。なので、使うものと使わないものをきちんと考えた方がいいのではないかとということですね。

【委員】

市の予算に関することが、全然、分からないので。例えば、私たちの活動って5千円あったらできること、1万円あったらできること、5万円あったらできることっていうのがあるのですよ。だけど、あのパンフレットに何百万かけているか分からないですけど、「その中の1万円くれたら、私たちこんなことができます」とか思う人がたくさんいると思います。例えばですが、100人の人に1万円ずつ配って、いろいろな小さい10人ずつくらいの早寝早起き朝ごはん運動をする方が、絶対有効なのではないかと私は思います。

【会長】

よく分かります。それを配るお金、配る方法、誰に交付していくのか難しい問題で悩ましいと思います。そういうところを超えていかないと、効率的なお金の使い方はできないのではないかとと思います。確かに、それは一つあると思います。

【副会長】

予算というか、どういったものが優先順位が高いのかっていうのが、それぞれでバラバラなところは、お金のかけ方が難しいと思う。じゃあ、高松市らしさを出すために何に投資していくのか、そういった根底のところを高松市だけが持っているのではよくなくて、それが市民だったり、それこそ我々だったら40歳未満の人だったり、共有できるようなプラットフォームが必要なのかなと。みなさんの話を聞いていると、情報発信って問題提起をして関心を持ってもらう、それが農業だったりスポーツだったり子育てだったり、いろいろなところにつながっていくことなのかというように聞いていたので、やっぱり根底で我々が何をしていくのか、まあ我々は予算はないですけど、どういう方向にいくのかっていうのを決めないと、効率的なお金のかけ方はできないと思います。そういったところを議論して、我々はどうしたいのかっていうところは議論がなければ継続性のない投資になって終わると思います。

【会長】

もっと見えてもいいかなとは思いますがね。こういうお金が、このように動いていますよというのがもう少し見える、今も見えない訳ではなく、一生懸命継続していけば見えてはきますが、さらに見えやすい、私もいろいろな国の委員で、例えば予算を決めているような委員会もありますが、しっかり公平性とかを担保しながら決めています、それは後々、きちんと手順を追うときちんと全部見えます。しかし、ある程度、広報高松を見ても、全体感は分かるけど、個別のものは分からないとか、目玉事業のところは分かるけど、それ以外は分からないというところがあるので、そこも業者にどんどん仕事を増やしてしまうのはよくないので、その辺の折り合いをつけられる市になればいいなと思います。

それでは、次の委員からお話をお聞きしたいと思えます。先ほどのお話と重なるところもあるかと思えますが、少子高齢化とか人口減少とかの中で、県外の御出身で、こちらで生活されていてという中で、違う視点で見えてくるかなというところもあります、どうでしょうか。今ある課題として、少子高齢化、人口減少、労働人口減少を中心として、NPO の活動でなかなかしんどい部分もあるし、このコロナで公共のサービスから漏れている人がいるということが今ある課題ではないかと書いていただいています、そのあたりのお話をいただければと思えますが、いかがでしょうか。

【委員】

暗いことしか書いていなくて恐縮なのですが、今回のコロナ禍、3月からの中で、私が関わってきた公共サービスからこぼれ落ちている人の話ですが、福祉それから介護、障がいに関わる人たちの福祉寄りの NPO のプロジェクトマネジメントとして結構入らせていただいています、皆さんとお会いしなかった3月から8月の間に、そういうプロジェクトに関わらせていただいたので、スポーツをとばして、こういうことになっています。今までパラスポーツという中で、パラアスリートの方と一緒にいろいろとやらせていただく中で、障がいを持っている方とか、そこの部分にも深掘りしていく障がい者、それから高齢者のところで深掘りしていくことが自分の仕事の中であったので、こういうことを書かせていただいています。もちろん、私も2月を最後に実家に帰れていません。私の父親も去年手術をしたので、免疫力が下がっている、私が行ったりということができないので、ずっと会えない状況です。コロナ禍の公共サービスの中で、バックアップしている企業自体がちょっと危うくなってしまって、活動ができない、予算の中で継続していくことが難しいけれど、そこを頼っていくという人がとても多かったように散見するところがあったので、今ある課題として出させていた

きました。高齢者も独居の方、夫婦世帯の方がとても多くて、東京にいて香川に自分の両親を置いてるという方からの御相談だったりとかヘルプだったりとか、この3月から9月の間でお父さんが倒れてしまったということで、緊急事態宣言が東京で出ている間、行くことができなくて、近隣の親戚も離れていて、お母さん自体もずっと入院生活をしているということで、緊急で私がサポートしたということもありました。なので、そこで関わっていくうちに私の中で見えてきた課題として出させていただいています。

【会長】

その中で、どちらかというと、今まで専門にされていなかった領域に入っていた中で、自分にできることと市に求めること、特に市に求めることで気づかれたことがあれば、記載以外のところでも深掘りしていただけたところがあればお願いします。

【委員】

市に求めるところですが、サービスもたくさんありますし、御相談させていただける窓口もたくさんあることとか、申請の手順とかは調べれば分かることもあるけれど、なかなか、その情報にたどり着けない人がたくさんいるという事実があります。それプラス、私たちも第4期U40前半に、やさしい日本語とかいろいろな提案をさせていただいたと思いますけど、その中で、関係課からありますと言われた事業がたくさんあったと思います。それがすごく残念だと思っていて、実はありますというのではなくて、それを求めている人の手元に届かないと、その制度があるということすら、存在すら気づかれないということがあって、やっぱり手元に届けるとこまで市に求めていきたいと思っています。

今回のコロナ禍に関連するところでは、本当はこの制度を使って申請すれば、お金をもらえたとか、この制度を使えば分かりやすくなったとか、そういうところの相談窓口だったりとか、申請の手順とか、そういうものを各部署とか各窓口によって様式が違ったりとか言い方が違ったりしてしまうので、手元に届きやすい、それから書類に関して、今回、みなさん持続化給付金とかいろいろな書類をいただいたと思いますけど、言葉とかフォーマットとか全部聞かれることが違うと思うので、もう少し見やすいデザインとかそういうものが見えてくるといいと思いました。

もう一つですが、よく市の方とお話させていただいて言われるのが、そういう団体を知らないのだから教えてくださいと言われることがあります。知らないことが

悪いことではないですけど、どういうところが関連しているというのは、できるだけどういう方が御活躍されているとか、こういう分野でおもしろいことをされているとかは、逐一、私たちも御紹介はできますけど、紹介をして終わりではなくて、例えば、企業と一緒に頑張って働きかけたりだとか、その人たちの手が届くところまでに、どういうところと一緒にやるのかっていうところを、もう少し踏み込んで考えていただけたらいいところまでくると、とてもいいのではないかと思います。

【会長】

困っている人とか、たどり着けない人に届けるようにという御意見だったと思いますが、それは高松市だけではないですけども、いろいろな自治体が工夫すれば届くような範疇なのか、予算がすごく必要なのかを考えた時、工夫で何とかなる部分なのではないでしょうか。それとも予算とかのお金も、ある程度かかるということなのではないでしょうか。

【委員】

もちろんお金がかかるとこもあると思いますが、まずは予算をかけないで工夫して手元に届けるというやり方もあるのかなとすごく思います。例えば、農業に関するところとかは委員の中にも高松市でいろいろやり取りをされている方がいらっしゃると思いますけど、そういうものをやっている人に対して、早めの段階で、例えば、農業体験に対してこういう予算がつかましたとか、こういうことが改正されましたとか、こういうことが新しくできましたとかといった情報を下ろすことで、そこに関わる人にも伝わるのではないかと思います。

【会長】

要するに工夫とやりようで大分変わるという認識ですよ。そこからトライしていく必要があるということですね。

【委員】

そうですね、それは、まず、できることなのではないかと思います。

【会長】

ありがとうございます。20年後の課題は、今ある課題を延長していつて出てくる社会問題についてなので、ある程度、共有できていると思うので、ここのと

ころは省かせていただいて、次の委員にお話を伺いたいと思います。

今の課題ということで、第4期の任期が限られている中で短い期間でできそうなこと、コミュニケーションの意図とか、高松市のことを記載していただいているんですが、この辺を含めて、自分たちにできることと市に求めることを併せてお願いします。

【委員】

最初にこのワークシートに書いたところが、将来である20年後の課題を先に考えてみたのですが、課題となるとマイナスなことしか出てこなくて、すごくマイナスなことばかり考えても、子どもが大人になった時、不安しか残らないと思ったので、子ども達が大人になった時にこういう感じの高松市だったら嬉しいなというのを書いてみました。今、ブータンが世界で一番幸せな国で載っているんですけど、じゃあ、日本一幸せな高松市ですよっていうのを全国に発信していけば、移住者とか転入者が増えていると思いますが、それが話題性となってさらに増えて、少子高齢化とかそういう話題が減ったりしていいんじゃないかなと思って、日本一幸せな高松市、住んでいる人が幸せなまちにするとしたらどうしていけばいいのかとなると、精神的な豊かさ、心が豊かな住民がいっぱい増えるとプラス効果で幸せなまちになるのではないかと思います。今、私自身は県外から香川・高松への転入のサポートをする団体をしているんですけど、私自身の団体にも、県外から香川に来て、いろんな不安や悩みがあって情報不足で困っている方が目の前にいたので、私が知っていることを教えるよという感じで、目の前のことを一個一個、今、取り組んでいるんですけど、幸せなまちにするには、まず、自分の目の前の課題をどうにかしたいなと思い、たどり着いたのがU40の委員同士が何をしているのか分からないという方が結構いたりとか、スケジュールが合わないので交流会をするにもできない、コロナでできないという状態で、高松市のU40の課題の共有が十分にできていないとか、高松市がU40に求めることがよく分からない状態だったので、まずそこから解決したいなっていうのがあり、こういうふうに書かせていただきました。

【会長】

それを解決するために、自分たちでできることをフェイスブックのページに活動を紹介したらどうだとか、U40のそれぞれの専門分野はどうですかとかを共有したらいいんじゃないかってのは、即、今の今でできそうなんで、逆に市に求めているものは、それ以外に具体的な事例がもしあれば。

【委員】

U40に入った時に、分厚い資料を一冊貰って課題がいっぱい書かれていたと思うのですが、これを見て自分ができそうなことをやってくださいじゃなくて、いつまで緊急性を要する課題かというものを先に教えてもらえていたら、これに対して皆で取り組もうという自然とそういう流れになるのじゃないかなと思って、今は個々で点だと思うのですが、委員さん同士が一個の目的地があれば皆で力を合わせて動いていけて、一つのU40という感じで纏まって作業ができるのじゃないかなと思います。

【会長】

我々同士がもっと話し合うのと、市とも話をもっともっと突き詰めていって、我々が何ができるのか、どういう懇談会としていくのかっていう、それもベースに固めて進めていくという事が、今、第4期になりますけれども、創造都市っていうものを推進していくために若い方の御意見をきちんと聞いて吸い上げていく、ある程度のところにきたら何かしらの政策で反映しようということですが、もっとコミュニケーションを取った中で見えてくるのかなと思います。

【委員】

コミュニケーションを取って楽しくしていたら、若い人達も楽しそうだなと来てくれると思うので、市とU40の風通しを良くして楽しくしたいなというのがあります。

【会長】

その延長上に、自分たちの子どもがどんどん成長していった時に、幸せな高松市っていうのが見えてくるのではないかという事ですね。ありがとうございます。

では、次の委員のお話をお伺いしたいと思います。将来的にはMICEのことでしたり、今ある課題の中で、多分、御仕事の的にはコロナで状況が一変していると思うのですが、その辺も含めて自分たちでできること、市に求めることなど等をお話しいただけますでしょうか。

【委員】

私、去年、民営化した高松空港に航空会社の立場から出向して、全体の高松の

観光というか交通のあり方についてやっているのですけれども、まさに、高松市、香川県に関しては、ここ数年間では、インバウンドに関して成功した全国の中でもなかなか珍しい地域だなと思っています。例えば、台湾線が絶頂期を迎えた中で、コロナで高松空港25便あった国際線が一気にゼロになって、国内線、東京線が半分になってということを目の当たりにして、外国人旅行客を受け入れていたホテルだったり、お土産屋さんだったり、ダイレクトにダメージを受けている。ただ、高松市に住んでいる市民の方に直接、利益にはならないのですけれども、都市としての在り方という意味で、観光で捉えていった時に、コロナ禍において考える機会になったと思ったのが一つと、直ちに何とかしないと今まで積み重ねてきたものが、これで一気に壊れてしまう。私の中で、将来、新しい観光MICEの経営の姿っていうのを見出していく必要があるなというふうに考えています。例えば、観光一つにしても国際線がゼロになった中で、じゃあ、どういう対応ができるかってなると、例えば、海外のものを国内に、やっぱりMICEで大型団体を誘致していたというものをワーケーションというところで県外から高松市に来てもらうということも考えられるかと思いますが、どうすれば、みんな話し合いができるような場を持つことが可能なのかを考える必要があると思います。

例えば、ワーケーションであれば、高松にはワーケーションが可能なエリアがあると思っています。例えば、仕事をするのに、島なら静かな場所で普段と違う環境で仕事ができるし、人が大声で喋ったりすることを避けるという意味では静かな観光地であるとか、自然の多いところであるので、そういったワーケーションをきっかけに、将来の移住を見出せたらなと思っています。なので、メンバーの声、何ができるかっていうのを吸い上げた上には、基本的な整備をしたり、予算だったりが必要になると考えてワークシートに書いた次第です。

【会長】

ありがとうございます。一番、鬼気迫っているなと思いながら、文章を読ませていただいたのですが、相当大変な状態の中でいらっしゃって、その中でも会社がこういう事を考えるから会合しようと呼びかけるのではなくて、市なり県なりの自治体が声を掛けて、旅客に関わるパターン、例えば鉄道とか観光、宿泊みたいな方々が集まってきて話をしていて新しい次の一歩を受け入れるためのプラットフォームとしての在り様というところのリーダーシップを取ってほしいというイメージでいいですかね。

【委員】

もちろん、自治体にそういったリーダーシップを取ってもらいたいというのもありますし、私は一つ、高松空港が民営化になったのが一番大きなところなので、まちや地域の魅力を発信することや、空港と自治体と地域が、地域の観光に関する話し合いの場を設ける形とかがいいと思っています。

【会長】

ありがとうございます。一つの提案として残させていただきながら、最後に、いろんな想定していない事態下でも需要を創出維持できる都市としての仕組み作りみたいなのって何となくでいいのですが、イメージってあるのですか。それとも、ないけど、こうあったらいいなというものなのですか。それだけ最後にお伺いさせていただきます。

【委員】

まさか、順調に進んでいた観光地としての高松が、コロナという予想もしなかったもので、半減ではなくゼロになるという機会を想定できなかったので、100あったものがゼロになる経験をしたので、もしかしたら、また10年後に、こういった病気ないし天変地異が起こることを前提に、今までできてなかった話し合いをする良いきっかけになると思っています。まだ答えは出ていません。

【会長】

いままで想定してなかった新しい形の危機管理っていうのを、事業者ベースとか業界ベースでやりたいという事ですね。

では、次の委員の方をお願いしたいと思います。今ある課題という事で、少子高齢化に対する危機感の醸成といいますか、ここも若者世代の投票率アップと先の委員の御意見と重なる部分もあるのですが、この辺を含めて自分たちができること、市に求めることとお話してください。

【副会長】

高松市の財政状況がどういう状況で、今かなり状況が悪くなるちょうど過渡期になってきているというところを我々がどういうふうを受け止めているかをというところが、私たち40歳未満の将来世代の人が、20年後にその影響を受けてどういう生活の影響を受けるかということは今からイメージしておかないと、その時に何を我慢して何を残すのかというような議論をできないと思います。ちょ

うど、今回、コロナによっていろんな事が抑制されるようになって、当たり前であったことが当たり前でなくなったことを疑似体験した凄く近い体験なのではないかと思っていて、こんなことになる前に我々が認識して、それは良くないよね、それを避けるために何ができるのか、それがもしかしたら観光業をするということにもなりますし、もしくは、移住者を増やすことにもなりますし、自分の職について関心を持つべきだということにもなるかもしれない。自分事として危機感を持つ。結局、みんな何にも危機感がないと関心を持たないですよ。なので、広く関心を持つというのは、悲しいかな危機感というのは、非常に効果的だなと思っていて、まさに危機的状況である予測も立っているわけなので、どうか、若者が必死に自分事と考えることを我々U40と名前がある唯一の高松市の組織なので、我々が何かできることはないかなと思います。その指標として投票率が非常に分かりやすいなど。我々世代の意見を代弁してくれる代表の高松市の議員さんを選ぶことで我々の意見を伝えることになるので、若者の投票率アップを目指すぞというのは非常に面白い指標だなと思っています。

【会長】

指標の話をしていただきましたが、じゃあ、具体的に指標を出せばよいかとなると、そうではないと思っていて、自分たちができることはこんなことがあるのではないかということであったり、市にもう少しこうすると面白くなるのではとか、もっと発展できるということがあればお願いします。

【副会長】

市に求めることとして、情報を届けること。ホームページや市報に載せてますよでは載せているだけで、届いているわけではないので、必要な方に届けるには、私の場合は、市の状況がこういうことで我々の生活がこういうことになるかもしれないということを正面切って話をすると、非常に面白くない話なので、皆さん関心を持たない。特に、若者世代は、バナナジュースやタピオカといったことの方が関心が高いので、そういったところは、例えばおしゃれさだったり、投票したぜというハイヴォータという格好の良い T シャツを着てファッションと繋げるとか、そういったことで、民間のデザイナーだとかクリエイターの方達の危機感ではない、民間のアイデアで、いかに市民の市政への関わりを作っていくかというのは民間だけではできないですし、市と民間のどちらもが含まれる組織だから立ち位置が取れることがあるのではないかなと思います。例えば、以前の第3期の実績で工芸ウィークをされて、いろんな伝統工芸士の方もいれば、販

売する事業者もいると。事業者の場合は、普段は競合相手だが、工芸ウィークという市のイベントをすることによって、横串がさされて一体感がある高松としての話題性のあるイベントにすることができた。それは、各事業者だけではできなかったことだったという事業発表が非常に印象に残ったのです。なので、行政だけではいけないし、民間だけでもいけないし、そこの何か新しいアイデアを考えられると非常に U40 世代を代表とする我々としてはやりがいのあることだなと思ひ、これを書いておりました。

【会長】

そういう意味では、U40の当事者としてやりがいも大事ということですね。

では、次の委員からお伺いしたいと思います。今ある課題としての「実行を先延ばしにする程、変化に伴う痛みは大きくなる」と、コロナ禍における既存産業について書いてくださっていますが、事業が多岐に渡っていらっしゃる中で、いろんな地域とも関わるし、若者にも関わっている中で、御自身を含め我々ができること、市に求めることを補足的にお話しいただけますでしょうか。

【委員】

自分の中で上手く処理しきれなかったのが、かなりスケールの大きい話を書いてしまったのと、自分に関わるミクロの話を書いているところが混ざっていて申し訳ないのですが、将来20年後の課題は、結局、高松市が、少子高齢化が進んでいく中でどういうまちになっていくかというところがあって、そうすると、既存産業を維持していただくだけでは難しいのは明白なので、どういったスケールでやるかを、大きな産業構造をルールを含め変えていくのを政治家がやっているようなことを含めやっていく必要があるのか、少なくともこの分野でやっていこうというところをフォーカスしていく、もっとフォーカスすると国民の方々の御協力を得られるような領域までもっとフォーカスしていくところと、スケールをどうさせていくかということになると思う。

書いたことは、一番広いものに対して何をするかの方の話と、個人の一番狭い範囲の何ができるかという話です。方法はたくさんあって、正解もいろいろあると思うんですが、自分たちができることを考えると、産業構造を変えらるか、より多くの人口が減る中でより多くの人生きていく中でお金をもらいながら生活していくのを考えると、結局 IT やデジタルを導入せざるを得ない。あとは、人口構造上も高齢の方が多くて若い方が少ない状況の中、若い人たちに生産をどんどんしていってもらわなければならない、それは、若い人たちにマネタリーや

権限をどうやって動かしていったらいいのかということになり、それをもう少し踏み込んでいくと、人事の制度とか、どういったものが高松市というまちの活用の中で評価する仕組みを作った方がいいのかとかであったり、そういったところを書いています。

それで、高松市に何をしてもらえると嬉しいかと考えた時に、結局は、どんどん変化していくときに応援してくれることが一番ありがたいことかなと思っています。あとは、年功序列みたいな形でのまちの在り方は難しくなっていくので、そういったことを高松市に評価していただくのもありがたいですし、じゃあ、どういう指標なら、高松市が政治の中で納得し、対外的にもそういった新しい指標みたいなものがあると説得力も上がるのではと思っています。あとは、単純な話で教育にける若い方への予算を削ることは絶対ありえない。教育にけるお金が減った瞬間に、この先の未来が暗くなるので、それはどんどん拡充してほしいですね。

個人の話でいうと、先ほど若い人たちとありましたが、若い人たちになればなるほど、この先5年、10年、20年になると情報が多様化されるのが逆らえない。その当時で、若い人に向けて発信する情報は、集約しておかないと届けること自体が難しくなるので、デジタルで今のタイミング、5年前はメールアドレス、今はライン、10年後だと別な媒体かもしれませんが、そういった一番最適なデジタルの方法を行政権限で作っていきながら、必要な情報を若い人に届けられるものをU40の活動で作れたらいいかなと思っています。長くなりましたが、どういうスケールをやっていくかというところと、それをどういう形でやっていくかというところは、少しU40としてはフォーカスの仕方が難しいところではないかなと思いますが、なるべく、大きな動きをしていけると一番いいのかなと思っています。

【会長】

意見としては、個に活動していることは自分たちでできるから、それを大きく広げて、大きな中で市と一緒に協働していければいいかなというイメージでいいですか。

【委員】

そうですね。大きくすればするほど巻き込む人間も多くなれば、関係者も増えるので、じゃあ、それを視野に入れてU40の場合、どこまでフォーカスを広げる、スケールを広げることができて、U40の今やっている活動と市に必要なス

ケール感のバランスが上手く得られる折衷点を見つけられたら一番いいのかなと。私の書いたものに関しては、そこまでできたら一番いいなという感じで、実現性は低いと思っているのですが、U40の場合で言うと、どこまでやるかなっていうところの話ができたらいいなと思っています。

【会長】

せっかくこういうフレームができていますのでゴールを目指したらいいのではないかなと一つの指標を示して下さっているのではないかなと思いました。

以上で本日出席の民間委員全員から御発言いただきました。ここで、今年、事務局に異動になられた方がおられるので、感想でもいただけたらなと思いますのでお願いします。

【事務局】

まず、事務局としてというより、移住者として感じたことを申し上げますと、高松市は県庁所在地として、企業や産業が集積しており、今回のコロナ禍の中でもデジタル化は進んでいるように感じております。支店経済ということで、本社等とのやりとり等をする上で、導入が進められているという報道もなされております。そういった中で、20年後どういう社会を目指していくのかということで、一番重要だと感じているところは、若者の活動を支援することであり、その意味で教育分野に注力する必要性が高いと思っております。その中で、高松市が取り組んでいる施策を見ておりますと、多岐にわたっているのですが、いろんなことに手を出しすぎていて、何を主にしているのか見えにくいというジレンマに陥っているように見えます。そういった中で、また、コロナ禍という状況もある中で、どういう対策を講じていくべきなのか、皆さんの御知恵も借りながら考えていきたいと思っております。

【会長】

私は第3期から入らせていただいて、いろいろな大きい流れの中で市の職員の関わり方というのが、U40の委員としての立ち位置と職員としての立ち位置と非常に難しいと思っていて、参加数が減ってきたというが、この第4期については、最初から引き継げたもの引き継げなかったもの、あと、今年は新型コロナウイルス感染症が発生して、リアルに会う機会が全面的に滞ってしまったところで、特にU40の民間委員は、ほとんどの方は自分の団体だったり自分で事業をしている方がいらっしゃったり、自分自身が対コロナというところで非常

に時間と労力を割かれていたということがあって、この第4期は、なかなか、特に後半のこの1年で巻き返そうと思っていた部分が、うまく進まなかったというのは現実的にあったと思います。しかしながら、そういう状態にあっても、今回、このワークシートを出していただいて、欠席された方も全員出していただいて、こういう方向でいろいろな議論をいただいて、もう1回会議があるので、これを現実に、どうやってまとめればいいのか思案しています。

それぞれの分野が違う、持っている問題意識が違う、すごく大事なところは共通しているということが多分にあるということですね。なので、その共通しているところを1つあぶり出しながら、最後の会議に向けて、会長、副会長と事務局で内容を預らせていただいて、どうまとめるのか、まとめきるのかというのも含めて話をして、みなさんに、いろいろ、こういうのを書いてほしいとか、こういうことを表現してほしいとか連絡するかもしれないですけど、そのアクションを待っていただいて、またリアクションしていただきたいと思っています。もう少しコロナが落ち着けば、次回の会議は皆さんで集まれたらいいなと思っていますけど、ぜひ Web で参加しやすいという方は、出席していただくことがとても大事ですので、引き続き参加していただきたいです。次回が最後の会議になるので、そこに向けて、いただいた御意見をこちらで預らせていただいて、今日は終わりにしたいと思っています。何かここまでのところで、御質問とか、これどうなっていますかとか大丈夫でしょうか。

【委員】

一つ、補助金とかの出し方について、農業関係だけでなく、女性支援というのもあったりして、予算いくら以上で何分の1出しますとかとなると、一個人で投資するなら欲しいものがあればパッと出せるのですが、団体で予算がないところに対して要求されたり、今年通ったから来年どうだっていうのがあったりして、それもどうなのかなと思います。断ったら予算がなくなるとかすると、ちょっとおかしい使い方もあるかなと思います。市に限らず、県とかいろいろなところの使い道ではあるのですが、ある委員の御意見でもありましたが、1万円でも5千円でもいい。報告書を出して、こういう活動をしましたとか、少しでもよくなる方向に使ってほしいかなと思います。使わなければいけないから、使わなければいけないとなっているのが、どうなのかなと。

【会長】

450万円使えばその2分の1を補助しますとか、そういうことではなくて、

もっと小さな額でということですよ。

【委員】

もっとみんながよりよく、ちょっとでも幸せになって、必要なところに予算が投じられればなと思います。それは業種関係なく、この分野って分かれすぎていて、種類別に分けられていると他の方もおっしゃっていましたが、まさにそうだなと思います。使い道が、例えば、私だったら農業以外で、こういうことがあればいいなと思うことでも自分では使えないとか、フリーな予算があって、新型コロナウイルス感染症とか突発的なこともあるでしょうし、必要な意見というのは、みんなそれぞれ挙げられるような時代になってくれれば、もっといろいろなことを拾えると思うので、小さな予算でもいいので、報告書を提出したら必ず出るとか、小さなことから始めれば広がるのではないかという感じはしています。

【会長】

おそらく、市の現場担当だとか管理職レベルでも無理ではないかと感じますが、でも、それはまた考えましょう。やりようっていうのは多分あります。そのやりようを私は知っていて、今までもやってきました。なので、それをU40が考えていくっていうことも、今後、第5期以降で、そういうやり方はあるのではないかと思います。一つ前の第3期のお金の使い方とか、まさにそうだと思いますが、U40が企画して工芸ウィークをやるとか、パラの競技大会に向けて「CAN MAP」を作るとか、みんなでモニュメントを作って残りの予算の中で生かしていくとかは、まさに、そういう使い方だったと思います。そんなものを、どのように、どういうことだったら公平性があるかとか、逆に、公平性はないけど公正な形で運営できるとかっていうのをしっかり考えていくというのが、民間委員がたくさんいて、市のみなさんと協議をしていく一つの形だと思います。変な話、うまくいっていたら、私たちの委員会なんていらないです。創造都市ができていたら、私たちの委員会がなくても創造都市が進んでいるということです。だから逆に言うと、我々の懇談会があって、市の皆さんとこうやって話をすることは、これまでにないような仕組みをどう作るのかっていうのは大事なポイントだと思うので、そういうところも含めて、今度の会議が第4期の最後の会議になるますが、第5期とかその先を見据えて、またいろいろ話ができればと思っています。

【委員】

今の話を聞きながら思ったのですが、質問というか疑問がいつもあるのですが、助成金って、例えば、うちの団体は申請すると、うちの団体の人は1円ももらえないみたいなのがほとんどで、誰か講師を呼んだり、何かしに来てくれたら、その人にはあげられるけど、私はもらえないみたいな仕組みがほとんどで、だったら誰も申請する意味ないみたいな。私たちが一生懸命頑張るのに、何で1円ももらえないのに、助成金を何で申請できるのかみたいな助成金ばかりで、これでは全く使えない状態で、少しでもこれをやろうという意識がある団体に、ちゃんと還元できるような助成金が欲しいと思います。今の状態では、他のところと連携して、「私これ申請するから別の団体さんにあげるから、別の団体さんが申請したやつを私にちょうだい」みたいにしなかったら生きていけないと思っています。

【会長】

会長でなければ、いくらでも言えるのですが、今言えるのは、行革担当大臣にメールをするのが一番早いと思います、半分冗談ですが、半分本気です。今の助成金の仕組みで、特にちょっと言い方は悪いのですが、産業をしている、いろいろな事業、たとえば工業製品を作っているとか、農業に従事しているとか、一次産業、二次産業、三次産業っていうところ、もしくは、情報産業に関わっているところの助成金というのは、いろいろな法人が運営していて、何百万、何千万と使ったら何%というのがある。基本的にNPOとか一般社団法人とかケアワークに近い介護とか子育てとか、そういうケアに関わるような仕事というのは、その人たちの人件費は基本見ないです。私もNPOに勤めていて、仕組みとしてはすごく分かります。その団体が直接利益をとらないような仕組みで運営しないと、これは悪用する人が出てきたから仕組みとしてそうなったというところがあるので、そういう部分をどうやって払拭するのか。じゃあ、高松市だったら、こういう仕組みになったらできるのではないかという提案を私たちはすることができます。今の仕組み上、それだったら申請団体はやっていけないではないか、せっかくいい企画があるのにできないということももちろん理解して、そういうところも含めて、公平と公正、あとは、そこに投資をすることで高松市をどういうまちにしていくのかというところを一緒に考える機会を、このU40もそうですし、大事だと思います。

他に御意見ありますか。なければ、これで本日の会議を終了したいと思います。

3 閉会

(事務連絡の後、閉会)